

相互行為からみたスピーチスタイルシフト

— 聞き手による「同調」に着目して —

申媛善

キーワード：相互行為、スピーチスタイルシフト、「同調」、「同調」シフト

1. はじめに

日本語は「デス・マス体」や「ダ体」といったスピーチスタイルが文末形式に組み込まれている言語である。日本語母語話者は場面や相手によってこれらを使い分けたり、あるいは同一場面・同じ相手でもスタイルの切り替えを行ったりする。会話例 1)を見ると、J3とJ4は子供の時の習い事について話す中で、「デス・マス体」と「ダ体」を混用していることが分かる。J3は107行において「考えられなかったですけどね」と「デス・マス体」で話しているが、109行になると「すごいと思った」というふうに「ダ体」に変わっている。しかし、112行では「何やってたんですか」と再び「デス・マス体」に戻っている。このように、「デス・マス体」から「ダ体」へ、あるいは「ダ体」から「デス・マス体」への移行など、スピーチスタイル間の移行をスピーチスタイルシフト¹⁾という。

会話例 1) スピーチスタイルシフトの例(P: 「デス・マス体」、N: 「ダ体」)

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
107	J3	自分が小学校とか、塾とか考えられなかったですけどね。	P
108	J4	うーん、塾とか行かなかった。	N
109	J3	中学校で塾行ってる人すごいと思っ <u>た</u> 。	N
110	J4	う、う、う、うん。	N
111	J4	習い事はさせられたけど。	N
112	J3	何やって <u>た</u> んですか？。	P
113	J4	そろばんと習字やってました。	P
114	J3	おー、そろばんは私、3級です。	P
115	J4	あ、結局1級かな。	N

*色分けは話者区別のためのもので一連番号が早い話者の発話に色をつけている。以下同様。

*会話例に使用した記号凡例は巻末の【記号凡例】を参照されたい。以下同様。

¹⁾ 研究者によっては、敬語レベルのシフト(生田・井出 1983)、待遇レベルシフト(三牧 1993)、スピーチレベルシフト(足立 1995、宇佐美 1995、上仲 1997、大浜他 1998)などの用語が用いられている。本稿においてスピーチスタイルシフトという用語を用いる理由は、「デス・マス体」を+、「ダ体」を-あるいは0などと、敬語あるいは待遇の面からレベルづけしてしまうと、「デス・マス体」は丁寧で「ダ体」は丁寧でない印象を与えやすいと考えたことにある。一般的に「デス・マス体」の方が「ダ体」より丁寧であるのは事実だが、場合によっては距離を取るための「デス・マス体」より親しみを表す「ダ体」の方が丁寧を受け止められることもある。管見の限り、スピーチスタイルシフトという用語を初めて使ったのは、伊集院(2001)である。

スピーチスタイルシフトに関しては、後に述べるように主に話し手の観点からシフトの生起条件と機能についての研究が盛んに行われてきた。本稿はスピーチスタイルシフトを話し手と聞き手の両方による相互行為として捉え、シフトが起こりやすい環境について考察する。

2. 先行研究と本稿の立場

先行研究では、成人同士によるテレビ対談や初対面会話など、「デス・マス体」を基本とする会話を分析対象とし、シフトの機能及び条件を考察している。【表1】は先行研究による結果をまとめたものである。

【表1】先行研究におけるシフトの機能・条件(陳 2003 に加筆²⁾)

	機能・条件	生田・井出 (1983)	三牧 (1993)	足立 (1995)	宇佐美 (1995)
心的距離 の調節	①相手への共感を示す	○	○	○	○
	②親しみを表す	○	○	○	○
	③冗談を言う時				○
	④相手の「ダ体発話」に合わせる時				○
	⑤聞き手から心理的に距離をもつ	○		○	
	⑥客観的姿勢			○	
談話の 展開標識	⑦小さな話題への移行	○	○	○	
	⑧新しい話題への移行	○	○	○	○
	⑨新しい話題を導入する質問に答える時				○
	⑩何かを確認したり、確認のための質問をする、あるいはそれに答える時				○
	⑪重要な部分の明示、強調		○		
	⑫意見、結論（一般化）			○	
	⑬注釈の挿入		○		
	⑭前の発話について説明や例示をする時	○	○	○	
	⑮独り言的な発話・自問するような発話		○		○
	⑯ダ体発話の挿入後、基本スタイルに戻る				○
	⑰中途終了型発話				○

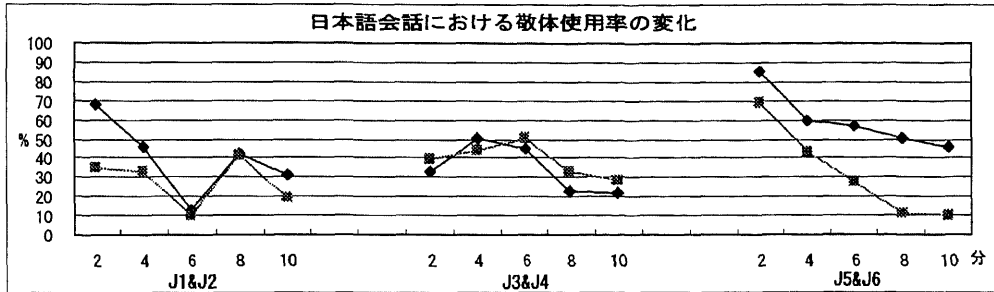
* 「○」が付いた箇所は当該先行研究でその機能・条件に触れていることを表す。

【表1】から分かるように、多くの先行研究では「①相手への共感を示す」、「⑧新しい話題への移行」など、主に話し手の立場からスピーチスタイルシフトの機能及び条件を説明している。しかし、シフトは話し手の発話末のスタイル変化で終わるのではなく聞き手の発話にも影響を及ぼすと考えられる。宇佐美(1995)は話し手のシフトから影響された聞き手によるシフトについて言及している唯一の研究である。【表1】における「⑧新しい話

² 陳(2003)では「ダ体」になりやすい状況について先行研究で言及されている項目をまとめているが、本稿ではそれに加え「デス・マス体」へシフトする状況やシフトの方向性は指定されていないがシフトが生起すると言及されている項目を追加した。

題への移行」に対する「㊸新しい話題を導入する質問に答える時」や「㊹何かを確認したり、確認のための質問をする、あるいはそれに答える時」、「㊺相手の「ダ体発話」に合わせる」などがそれである。

また、申(2007)は同年代の初対面二者間による会話を時間軸に沿って観察し、【図 1】のように敬体使用率の変化が話者間で似たような「同調パターン」を示すことを明らかにした。このことから、「デス・マス体」から他のスピーチスタイルへのシフトにおいて、話者間で互いに相手に合わせてシフトを行っている可能性を指摘している。



【図 1】「同調パターン」の例

このようにスピーチスタイルシフトはそれが行われた話し手の発話で終わるのではなく、シフトを受けた聞き手の発話末にも影響を及ぼすと考えられるため、本稿では、話し手のみならず聞き手の側面も取り入れ、両者による相互行為という観点からスピーチスタイルシフトを考察する。特に、申(2007)で指摘された「同調」現象に着目する。本稿では「同調」を「相手のスピーチスタイルシフトに合わせたシフト」と定義し、1) 「同調」に先立つ話し手のシフト(以下、先行シフト)、2) 聞き手による話し手への「同調」シフト、という 2 つの観点からシフトが起こる環境を考察する。以降、本稿における話し手とは、「同調」に先立ちシフトを行った話者を、聞き手とはそれに「同調」しシフトを行った話者を指す。但し、言語行動のみで話者の心的距離を測ることは容易でないため、本稿では「談話の展開標識」に関わるシフトのみを扱う。

3. 研究方法

3.1 使用データ

本稿で用いたデータは初対面日本語話者 3 組による会話で、「デス・マス体」が基調として使われているものである。会話参加者は全員女性で、日本在住の大学院生であり、ペアである話者 2 人は性別、年齢、社会的地位の面において同等の関係にある。会話時間は各組 10 分で、計 30 分のデータである。収集したデータを宇佐美(2003)の「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」に従って文字化し、計 626 の発話が得られた。会話参加者の属性及び組み合わせは【表 2】の通りである。

【表 2】 会話参加者の組み合わせ

1	J1 (24, M1)	J2 (24, M2)
2	J3 (23, M1)	J4 (23, M1)
3	J5 (24, M2)	J6 (24, M2)

*括弧内は録音当時の年齢と学年を表す (M: 修士課程)。

3.2 スタイルの分類

各発話は伊集院(2001)の基準に修正³を加え敬体(Polite form、以下「P」、常体(Non-polite form、以下「N」、中途終了型発話(No-marker、以下「NM」)に分類した。

敬体(P)とは文末が「デス・マス体」の言い切りやそれに終助詞あるいは接続助詞が付いているものを指す。例えば、「前住んでました／私も早生まれなんで 81 なんですけど／部活はアイスホッケー部だったんですよ」のようなものである。

常体(N)は文末が「ダ体」の言い切りやそれに終助詞あるいは接続助詞が付いているものを含む。「ダ体」の言い切りは名詞・動詞・形容詞・形容動詞の普通形及び名詞・代名詞・副詞の一語文とした。「もらって来るだけもらって来た／15%？／うん、でもね、凄まじい／そんな東京出るのも難しくないし／暑いね」などのものである。

最後に中途終了型発話(NM)とは、述部がなくスタイルを判断できない発話、文法的には終了しているが、上昇や下降イントネーションが表れず平板のまま引き伸ばされている発話、文法的にも終了しておらず言いよんでいる発話を指す。「洗わないとやっつけられないみたいなの／“これ、間違いなんだね”って、消しゴムで消して書き直して／え、じゃあ、地理っていうか、なんか、政治・経済が絡んだ感じの...？／あ、多分同じ学年...」のような発話が入る。

3.3 本稿におけるスピーチスタイルシフト

金(2002)によると、スピーチスタイルシフトの分析には以下の3つの見方がありうると思われる。

- i) 話し手によるか、聞き手によるかに関わらず直前の発話に対して話し手が文末スタイルを変えた場合
- ii) 同一話者の発話においてシフトが生じた場合
- iii) i)と ii)を合わせて考察する

i)及び、i)を含むiii)の方法だと、話し手のシフトの直後聞き手が同一のスタイルにシフトした場合、それを見落としてしまう恐れがあるため、本稿では話者それぞれのシフトを考察できるよう ii)の方法で分析する。

³ 伊集院(2001)では文末のスピーチスタイルを大きくデス・マス体、ダ体、不明の三つに分類した上で、接続助詞や終助詞の付加によってデス・マス体、ダ体をさらに分類しているが、本稿では下位分類は行っていない。

但し、成人同士の初対面会話という性質上、会話ではほとんどの話者がスピーチスタイルとして主に敬体を選択していたことから、スピーチスタイルシフトを分析するに当たっては敬体以外の発話、つまり、常体や中途終了型発話に注目する必要があると考えられる。そこで、本稿では、常体や中途終了型発話を合わせて「敬体不使用」とし、「敬体使用から不使用へのシフト」、「敬体不使用から使用へのシフト」を考察対象とする。

3.4 分析単位と「同調」の判断基準

【表1】の「⑧新しい話題への移行」、「⑩意見、結論(一般化)」や「⑩何かを確認したり、確認のための質問をする、あるいはそれに答える時」、「⑭前の発話について説明や例示をする時」など、先行研究の結果からも示唆される通り、スピーチスタイルシフトは話題の移行及び展開と関連があるように思われる。本稿では1つの話題について話されており、まとまりをなす発話の集合体を「話段」と呼び、スピーチスタイルシフトの分析における単位とする。

また、本稿では「同調」を、「相手のスピーチスタイルシフトに合わせたシフト」と定義しているが、話し手による先行シフトと聞き手による「同調」シフトが「質問—答え」のように1つのやりとりで現れるとは限らない。以下の会話例2)のように、先行シフトが行われたやりとりではなくその次のやりとりで聞き手によるシフトが起こることもある。会話例2)では、96行まで1つの話段が終わり、97行でのJ2の質問によって新たな話段が始まっている。97行においてJ2は常体へシフトしたものの、J5は敬体を使っており、まだ先行シフトに対する「同調」シフトは見られない。しかし、99行におけるJ2の確認に対し、100行でJ5が中途終了型発話にシフトし敬体ははずすことで両者のスピーチスタイルの一致が見られる。

会話例2) 同話段内で先行シフトと「同調」シフトに時間差が生じた場合

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
95	J2	去年1年間研究生をやってて(んん)ま、2年目には入るんですけど(うん)。	P
96	J2	あんまりよく分からないですね<二人笑い>。	P
97	J2	筑波大生？。	N
98	J5	はい、<そうです> [<]。	P
99	J2	<アンダーから> [>] ?。	NM
100	J5	そのまま(うん)もう6年間もこんな(うん)ところに<笑い>。	NM

4 基本的にザトラウスキー(1993)の「話段」と一致する。ザトラウスキー(1993)は日本語の勧誘談話の構造を分析するに当たり、「話段」を「談話」の下位単位として設け、「談話の内部の発話の集合体が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される部分」と定義した上で「勧誘の話段」と「勧誘応答の話段」を主な分析単位としている。しかし、本稿は初対面会話を分析対象としており、「勧誘」など、特定の目的はないに等しい。強いて言うなら話者2人が互いを知っていくことが目的といえよう。本稿では、申(2006)を参考に学年、年齢など、相手に関する情報や自分の体験談の披露など、互いを知っていく過程の1つ1つを基準に話題を区別し「話段」を区切った。

本稿では、話し手の先行シフトの直後に生じた聞き手のシフトのみではなく、時間差が生じて生じた聞き手のシフトも「同調」シフトと認め、「同調」シフトが見られた際の話し手と聞き手のやりとりの環境を記述することとする。話し手のシフトに瞬時に反応できず、後続のやりとりにおいて「同調」シフトを試みることも想定できるからである。但し、このような遅れた聞き手のシフトを「同調」シフトと認めるのは同じ話段の中でのシフトに限る。

3.5 分析手順

本稿では以下の手順で分析を行う。

- 1) 先行研究の結果に基づき「談話の展開」に伴って生じたシフトを取り出す。
- 2) 「同調」が行われている箇所を抽出する。
- 3) 「同調」に先立つ話し手によるシフトの生起環境を考察する。
- 4) 聞き手による「同調」のシフトの生起環境を考察する。

紙幅の都合上 1)と 2)の過程の紹介は割愛し、3)、4)を中心に 4 節で結果及び考察を述べることにする。

4. 結果と考察

「談話の展開標識」と関連し「同調」が起こっている環境を調べた結果、①話し手が話題を変えるために聞き手に質問したり自分に関わる話題を持ち出したことに対し、聞き手が答えたりあるいは反応する際、②話し手が話題をまとめるような発話を発した場合、聞き手がそれに賛同する際、③話し手が確認をするために質問し、聞き手がそれに答える際、④話し手が詳細な説明をした場合それに対し聞き手が何らかの反応を示す際、以上 4 つの場面において「同調」が観察された。①と②は話題が変わる移行部分に当たり、③と④は話題が展開されていく過程でのやりとりであるため、以下では「話題の移行」と「話題の展開」に分けてそれぞれ例を提示しながら順に考察していく。

4.1 話題の移行

① 話題転換—答えあるいは反応

先行研究では「新しい話題への移行」におけるシフトは主に聞き手への「質問」によるものに限られているが、本稿のデータからは話し手自らが自分あるいは自分に関わる話題を持ち出す、いわゆる「自己開示」によるものも多く出現していた。まず、話し手が「質問」を通して新たな話題へと転換を行い、それに答える中で聞き手が話し手と同じスタイルにシフトしている例、つまり「同調」が行われている例を見る。「答え」において聞き手によるシフトが見られたのは 10 例で、その中で話し手への「同調」が認められるのは 7 例であった。

会話例 3) 質問：一年遅れての入学 ⇒ 就職

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
104	J1	でも、すごい久しぶりに話した人もいます。	P
105	J1	『あれ、就職したんじゃないんだっけ』とかいわれて。	NM
106	J2	あ、うっかりみたいなく笑い>。	NM
107	J1	うっかり<笑い>。	N
→ 108	J2	じゃ、将来はそういうのに進むような道って、/少しの間/あるんですか？。	P
→ 109	J1	うーん、あんまりないですね。	P
110	J1	地理ってなんか就職に結びつきづらいから。	N

* 「→」：該当発話を表す。以下同様。

会話例 3)では 107 行まで「J1 が人より一年遅れて大学院に入学したこと」に関わる話がされていたが、108 行で J2 が「じゃ、将来はそういうのに進むような道って、あるんですか」と質問することによって「将来の就職」についての話題が変わる。J2 は直前の発話の 106 行では中途終了型を用いて J1 の話に反応を示していたが、108 行で質問するに当たっては敬体にシフトしている。一方、J1 は J2 の質問に対し「うーん、あんまりないですね」と敬体にシフトして答えることで両者の文末のスピーチスタイルが一致している。

「質問－答え」は隣接ペア(adjacency pair)の 1 つであり、第一成分(質問)がくると第二成分(答え)が来るという期待がかなり強い性質上、2 つの発話は強い結びつきがあるといえる。このような両発話の強い関係性から形態の類似性が生じたのではないかと考えられる。

次に、話し手が「自己開示」によって話題を変え、聞き手がそれにあいづちを打ったり話し手の発話を一部繰り返すなどして理解を示すような発話において「同調」が見られた。こういった聞き手の発話を「反応」と呼ぶこととする。下記の会話例 4)において 79 行が「自己開示」、80 行が「反応」に当たる。「自己開示」に対する「反応」において聞き手のシフトが見られたのは 10 例あり、そのうち「同調」として認められるのは 9 例であった。

会話例 4) 自己開示：調査者の国籍 ⇒ J6 の研究室の外国人

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
76	J6	え、どこの国の人？。	N
77	J5	えーと、韓国からいらっしゃってるみたい。	N
78	J6	あ、韓国なんだ。	N
→ 79	J6	うちの研究室も（あ）けっこう外国人いますよ。	P
→ 80	J5	あ、そうなんですか。	P
81	J6	先生外国人なんですよ。	P
82	J6	で、日本語しゃべらなくて。	NM

会話例 4)は J6 の「自己開示」によって「調査者の国籍」に関する話から「J6 の研究室の外国人」に関する話に話題が変わる例である。J6 は自分の研究室の事情を持ち出す中で

78行までの常体から敬体にシフトしている。J6の話題導入に続きJ5は80行で「あ、そうなんですか」と反応しているが、J6が常体から敬体にシフトしたことと同じく、J5も77行の常体から敬体にシフトしていることが分かる。

このような「自己開示」に対する「反応」は隣接ペアのように強い結びつきではないが、直前の発話に対する理解あるいは反応を示していることから直前の発話との意味的關係が深い。両発話における文末のスピーチスタイルの一致、すなわち形態の類似性は意味内容の密接さに起因したものと考えられる。

宇佐美(1995)は新しい話題を導入する発話や新しい話題を導入する質問に答える発話において敬体へのシフトが見られる⁵と指摘している。会話例3)、4)からも分かるように、本稿のデータでも新たな話題を導入するための「質問」や「自己開示」においてシフトが起こる場合、その方向は敬体不使用から敬体使用へのシフトとなりやすい傾向が見られた。また、そのような話し手の発話に対し聞き手が答えたり反応したりする発話において「同調」が起こる場合、両者による文末のスピーチスタイルは敬体で一致しやすくなる。「質問-答え」における「同調」の7例中7例、「自己開示-反応」における「同調」の9例中7例が敬体で一致していた。仁田(1991)、野田(1998)によると、聞き手が存在する発話、あるいは聞き手を意識する発話は丁寧体で現れやすいという。「質問」は明らかに聞き手に向けた発話であり、「自己開示」は、終助詞「よ」の使用が伴われることが多く、聞き手を意識した発話といえる。話題が変わるような環境においてシフトが起こった際にその方向性が敬体へのシフトとなりやすいのは、聞き手の存在や聞き手への意識が起因していると考えられる。

② まとめ-賛同

本稿における「まとめ」とは、1つの話題に関わる発話の集合、つまり話段が終わるところに現れる感想や意見など、話題を収束に向かわせるような発話を言う。足立(1995)は意見、結論(一般化)を語る発話においてシフトが起こることを指摘しているが、本稿のデータからもそういった性質を持つ発話において話し手による先行シフトが観察された。また、聞き手が話し手の「まとめ」を受けそれに賛同する際、話し手のスピーチスタイルに合わせ「同調」を行うことが観察された。「賛同」において聞き手のシフトが見られたのは8例で、そのうち7例が「同調」として認められた。

以下の会話例5)は「J2の通っていた高校は台風が来ると休校になることが多かった」という内容が話されている場面である。J1は129行で「帰ったり？」と敬体を外して確認を行っているが、131行で「大変ですね」と全体的な感想を述べながら敬体にシフトしている。J2はそれを受け132行で、J1の発話を繰り返し「大変ですよ」と「賛同」を表している。

⁵ 宇佐美(1995)では、尊敬語、謙譲語、美化語等を含む改まり度の高い発話を「+」、丁寧体(本稿でいう敬体に相当する)を含む発話を「0」、常体を含む発話や質問に対する簡略すぎる答え等、改まり度の低い発話を「-」とし、「新しい話題を導入する時」や「新しい話題を導入する質問に答える時」は「-」から「+、0」へシフトが起こるとしている。

その際 J2 は J1 と同じく中途終了型発話から敬体へシフトすることで両者のスピーチスタイルの一致が見られる。

会話例 5) 台風による休校

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
128	J2	学校行って、向こうの駅まで着いて（うん）、スクールバスが来ないとかいって、『あ、どうも休校なんじゃないか』といて、家に電話かけて。	NM
129	J1	帰ったり？。	NM
130	J2	帰ったり、迎えに来てって。	NM
→ 131	J1	大変ですね。	P
→ 132	J2	大変ですよ。	P

「自己開示－反応」同様、強い結びつきではないが、「まとめ－賛同」も内容の類似性から形態の類似性が起因したものと思われる。

「まとめ」に賛同する聞き手の「同調」シフトは敬体使用への方向が多く、「同調」シフトの 7 例中 6 例が敬体使用へのシフトであった。このような「まとめ－賛同」における敬体へのシフトは、後の 4.2 節で述べるように話題が展開されるにつれ敬体から逸脱したスピーチスタイルを会話の基調となる敬体に戻すことで話題が収束段階に来ていることを示す働きをしていると考えられる。「話題転換」が行われる発話において敬体へのシフトが多かったことと合わせて考えると、話題の移行とスピーチスタイルシフトの方向が連動している可能性がうかがえる。

4.2 話題の展開

③ 確認－答え

本稿における「確認」とは話題を変えるような質問ではないが、自分の理解が正しいか確かめたり、より詳しいことを聞いたりする発話を指す。このような話し手の「確認」に答える聞き手の発話において「同調」シフトが見られた。会話例 6) における 46 行、47 行がそれに当たる。確認に対する「答え」のうち 24 例からシフトが見られ、その中の 14 例が「同調」シフトと認められた。

会話例 6) J4 の住まい

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
44	J3	え、「J4 の住む町」とかどうですか？。	P
45	J4	あ、いいでしょう。	P
→ 46	J3	どのくらい、二人で？。	NM
→ 47	J4	二人で 6 万なんで。	NM
48	J3	2DK？。	N
49	J4	3DK。	N

会話例 6)において、J3 は 44 行で敬体をもって「え、「J4 の住む町」とかどうですか」と質問し新たな話題を導入するが、46 行で具体的に今住んでいる部屋の家賃を聞くとなると敬体を外し中途終了型発話にシフトしている。それに対し、J4 は「二人で 6 万なんで」と敬体ははずして答え、2 人のスピーチスタイルが中途終了型で一致している。

話題の移行に関わるか否かによって「確認」と「質問」は区別されるが、「確認」とそれに対する「答え」も「質問－答え」同様、隣接ペアであり、2 つの発話の間には強い結びつきがあるといえよう。「確認－答え」における「同調」はそういった発話間の強い関係に基づくと考えられる。

このように「確認－答え」ペアで「同調」が起こる際は常体や中途終了型発話で一致することが多かった（「同調」シフトの 14 例中 13 例が敬体不使用へのシフト）。宇佐美(1995)でも「何かを確認したり、確認のための質問をする、あるいはそれに答える時」は常体へシフトすることが指摘されている。その理由としては、まだ話題が終わっていないことから簡潔性が優先された可能性が考えられる。

④ 詳細説明－反応

三牧(1993)では「重要な部分の明示、強調」、「注釈の挿入」、「前の発話について説明や例示をする時」などにシフトが起こることが報告されている。本稿のデータでは、既に話された内容について補足する、例を挙げる、説明を加える、強調するといった発話において話し手による先行シフトが観察された。以降、このような補足や例示、追加説明、強調を総称し「詳細説明」と呼ぶこととする。一方、話し手による補足や語りなどが続く中で、聞き手があいづちを打ったり話の先を予想して言うなど、何らかの「反応」を示す発話において「同調」が見られた。下記の会話例 7)における 54 行と、55 行の発話がそれぞれ「詳細説明」と「反応」である。聞き手による「反応」においてシフトが見られたのは 15 例で、そのうち 9 例において「同調」シフトが現れた。

会話例 7) 先生の構成

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
52	J6	「学群名」もちよっといるんですよ、先生。	P
53	J5	あ、そうなん、なんか、いろんな学類の先生がいるんですね。	P
54	J6	そう、できてどのくらいなんだろう、他の研究科よりけっこう新しい目ぼくて（へー）、なんか医専の人もあるし、あとどうだろう、なんかよう、他の大学、あ、じゃないや、研究のところ??、研究機関の、国立環境研究所とか産業技術研究所とか（はい、はい）そこから先生を数人呼んで（へー）やってるところもあるし。	N
55	J5	あ、そうなんだ。	N

会話例 7)は J6 が「自分の所属する研究科には他の専門の先生もいる」ということを話す場面である。J6 は 52 行でまず「「学群名」もちよっといるんですよ、先生」と敬体をもって情報を提供しているが、54 行でさらに詳しい背景を説明する中で文末のスピーチスタイルを常体にシフトしている。そのような「詳細説明」に対し J5 は、「あ、そうなんだ」と常体にシフトして「反応」を示し 2 人の文末のスピーチスタイルは常体で一致している。

「詳細説明－反応」はあいづちなどの「反応」が必須ではないことから隣接ペアのように強い結びつきではない。しかし、「反応」は直前の発話に対する理解あるいは聞いていることを示していること、また、先行発話なしでは単独で存在し得ないことから直前の発話との関係が深いといえる。「自己開示－反応」、「まとめ－賛同」同様、発話間の密接な意味的關係が形態の類似性をもたらし「同調」が起こるようになったと考えられる。

こういった「詳細説明」の発話におけるシフトは、敬体使用から不使用へのものが多く、「詳細説明－反応」も敬体不使用で一致することが多い（「同調」シフトの 9 例すべてが敬体不使用へのシフト）。これは、メインとなる発話がすでに発せられた後だったり、あるいはまだ発せられていないため、敬体を回避しやすくなると考えられる。野田(1998)は従属節と同じようにほかの文に従属している文、すなわち従属文は常体になりやすいとする。本稿における「詳細説明」は従属文の性質を持っているといえよう。

4.3 まとめ

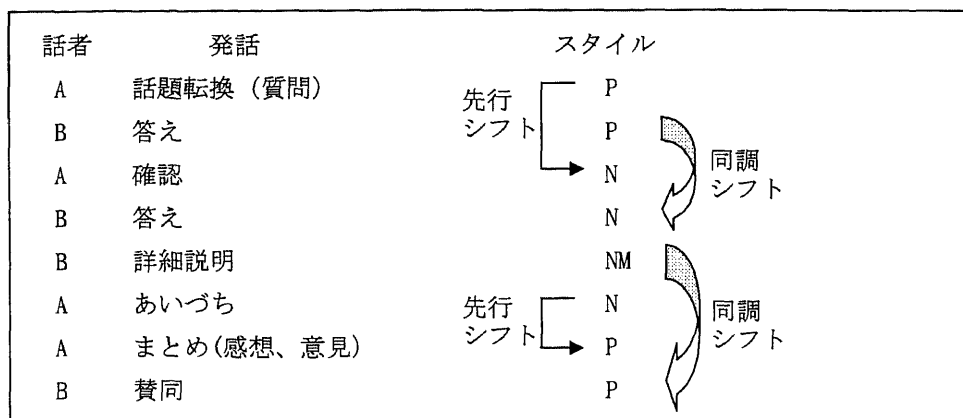
「同調」は「質問－答え」、「確認－答え」のような隣接ペアのほかに、「自己開示－反応」、「詳細説明－反応」、「まとめ－賛同」のように内容的に密接な関係を持つ発話間で起こりやすいことが明らかになった。「同調」の際、話し手と聞き手のスピーチスタイルが敬体使用、あるいは不使用のどちらで一致するかは話し手による先行シフトの方向によって決まるが、それは話題が展開されていく過程なのか話題の変わり目なのかの影響するものと考えられる。すなわち、話題が展開されていく過程であれば敬体不使用へ、話題の変わり目であれば敬体使用へシフトする傾向があると推察される。宇佐美(1995)で「話題導入」や「確認」におけるシフトの方向性が一部指摘されているものの、「話題の展開」や「話題の移行」とシフトの方向性との関連についてはそれほど研究がなされていないように思われる。それに関しては今後データを蓄積しさらに追究したい。

5. おわりに

本稿は従来の研究ではほとんど考慮されることのなかった相互行為の観点からスピーチスタイルシフトを捉え、「同調」という「相手のスピーチスタイルシフトに合わせたシフト」に着目しその生起環境を考察した。その結果、聞き手による「同調」は、話し手の質問に対する答えのような隣接ペアや、話し手の「詳細説明」に対し「反応」を示す際などに観察され、直前の発話と形式的あるいは意味的に関連がある場合起こりやすいことが明らか

になった。また、「同調」の方向を決める話し手の先行シフトにおいては、「話題の展開」、「話題の移行」とスピーチスタイルシフトの方向が連動している可能性を指摘した。

以上の考察を踏まえ、話題が展開されるにつれ話し手による先行シフト及び聞き手による「同調」シフトがどのように繰り返されるかをモデル化すると、【図2】のようになる。



【図2】同一話段内の先行シフト及び「同調」シフトのモデル

【図2】において、Aは敬体を用いて新しい話題へ移行したものの、Bに「確認」を求めるときは敬体ははずしやすい。しかし、自分の感想や意見などを言いながら話題を収束に向かわせる際には再び敬体に戻る。一方、Bは敬体でのAの「質問」を受け敬体で「答え」るが、敬体ははずしたAの「確認」に対しては敬体不使用へとシフトを行う(「同調」)。その後、補足や例示など「詳細説明」をする中で敬体からの逸脱を維持するが、敬体をもってのAの「まとめ」に対し、敬体にシフトする(「同調」)。【図2】ではBがAに「同調」する立場になっているが、実際には常にある話者が一方的に追随するわけではない。申(2007)でも指摘している通り、「同調」は双方によって行われ、追随する話者は話題ごと、あるいは発話ごとに変わると考えられる。

但し、本稿の結果は女性同士による会話をデータとしているため、男性同士、また男女による会話でも同一の結果が出るとは限らない。今後は性別や年齢など話者の属性のバリエーションを増やし検証していきたい。また、「同調」が起こりやすい発話間の関係性をより明らかにしていく必要がある。

【参考文献】

- 足立さゆり(1995)「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』5, 73-87, 拓殖大学留学生別科
- 生田少子・井出祥子(1983)「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12(12), 77-84, 大修館書店

- 伊集院郁子(2001)『母語場面及び接触場面におけるスピーチスタイルの分析—ポライトネス理論の観点から—』東京大学大学院総合文化研究科 修士論文
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662, 27-42, 昭和女子大学近代文学研究所
- 宇佐美まゆみ(2003)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 4-21, 平成 13-14 年度 科学研究費補助金基盤研究 C(2)研究成果報告書
- 大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀(1998)「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『中国四国教育学会 教育学部研究紀要』44(2), 389-397, 中国四国教育学会
- 金珍娥(2002)「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」『朝鮮学報』183, 51-91, 朝鮮学会
- ポリリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 申媛善(2006)「情報のやりとりにおける受信者側の働き—日本語話者と韓国語話者の比較—」『筑波応用言語学研究』13, 85-98, 筑波大学 人文社会科学研究所 文芸・言語専攻 応用言語学領域
- 申媛善(2007)「日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み—時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して—」『日本語科学』22, 173-195, 国立国語研究所
- 鈴木睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』, 45-76, くろしお出版
- 陳文敏(2003)「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14, 7-28, 国立国語研究所
- 仁田義雄(1991)「言表態度の要素としての〈丁寧さ〉」『日本語学』10(2), 65-75, 明治書院
- 野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194, 1-14, 国語学会
- 日高水穂・伊藤美樹子(2007)「スピーチレベルシフトの表現効果—シナリオ「12人の優しい日本人」を題材に」『秋田大学教育文化学部研究紀要』人文・社会科学第 62 集, 秋田大学
- 三牧陽子(1993)「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』第 I 部門(人文科学) 42(1), 39-51, 大阪教育大学

【記号凡例】

- 。 1 発話文の終わりにつける。
- ,, 発話文の途中で相手が割り込んだ場合、前の発話文が終わっていないことを表す。
- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式でなくても、語尾を上げるなど、疑問の機能を持つ発話には、発話末に「?。」をつける。
- ?? 確認などのために語尾をあげる、いわゆる「半疑問文」につける。
- … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。

- () 相手の発話中に打たれたあいづちはその発話の最も近い部分に()にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に説明を記す。もし、相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入った場合は、(<笑い>)とする。
- < > {<}, < > {>}
- 同時に発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{<}をつける。また重ねた方の発話には< >の後に{>}をつける。
- 「 」 固有名詞等、話者のプライバシー保護のために明記できない単語を表すときに用いる。
- 『 』 話者自身の発話を引用した場合は、その部分を『 』でくくる。
- ### 聞き取り不能であった部分につける。